

# 韓国人日本語学習者の誤用について

## —接続助詞「テ」と「カラ・ノデ」を中心として—

森山 新 (홍익대학교 전임강사)

### CONTENTS

1. 研究の目的
2. 研究の対象と方法
3. 学習段階と接続の誤用の実態
4. 学習段階と「カラ・ノデ」「テ」の誤用の実態

◆2회에 걸쳐 연재 예정

### 1. 研究の目的

韓国における日本語教育現場では、外国語学校(学院)や大学での教養日本語を中心に今なお旧態依然として、文法訳読方式による授業が行われているところが少なくない。こうした教育現場では、日本語が「語彙レベル」で教えられる傾向がある。例えば「해서」は「テ」、「니까」や「기 때문에」は「カラ・ノデ」、「때문에」は「タメ(ニ)」といった具合にである。ところがこの方式は母語の干渉を受けやすく、いわゆる「韓国語式の日本語」を生み出しやすい。

特に本稿にて扱う「接続」の問題は、複文構造の前後要素と後接要素が、接続助詞によってどのように結びつけられているかといった問題であり、「文構成レベル」で取り扱われるべきものであるため、これを「語彙レベル」で教えることにはいささか問題がある。

従って本稿ではこうした「接続」の誤用のうち、もっとも学習初期の段階から頻繁に見られる「テ」と「カラ・ノデ」の誤用に焦点を絞り、誤用の傾向と原因、及び対策について明らかにしてみたい。

## 2. 研究の対象と方法

本稿の調査の対象は前回の事例研究「韓国人日本語学習者の誤用について」<sup>1)</sup>の際に収集したデータのうち、Kの作文を分析したデータ結果を用い、これを再分析したものである。調査の対象となった作文は、学習開始から2カ月目の1993年6月から、95年11月までの2年半の作文である。方法は毎日授業終了後に自宅で書いた作文を提出させ、次の作文を提出する際に添削して返却した。

作文の内容は、最初の2カ月(93年6~7月)は、その日に習った教科書の本文を応用して作文が書かれた。例えば「何時」という表現を習い、本文で「一日の生活」がテーマになっている日にはそのような作文が書かれ、「家族の呼び名」を習い、「家族紹介」が本文のテーマの時は、自分の家族紹介が作文として書かれた。それ以降は日記のように、その日にあったできごとがテーマとなった。

文体は日記形式で作文を書いたため、初期を除いて「デス・マス体」はあまり用いられず、「ダ体」が中心であった。

データは便宜上、次のように5期に分けて整理した。

第1期；93年6月~94年2月(3~5月には作文は書かれなかった)

第2期；94年6月~94年8月

第3期；94年9月~94年11月

第4期；94年12月~95年2月

第5期；95年9月~95年11月

本稿では、調査期間の<第1期>から、<第5期>のうち、学習1年目の<第1期>(93年6月~94年2月)を学習初期、学習2年目の<第2期>~<第4期>(94年6月~95年2月)を学習中期、学習3年目の<第5期>(95年9月~11月)を学習後期というように区分することにした。

なお、「テ→カラ」は誤用「テ」を「カラ」に訂正したことを意味し、誤用例文末の(9509)などの数字は「95年9月」に書かれた作文からの引用であることを示している。

## 3. 学習段階と接続の誤用の実態

<表1>はKの作文に現れた「接続」の誤用傾向で

ある。

これを見ると、「接続」の誤用は<第1期>には少なく、<第2期>で増加し、<第5期>に入ると、「ノニ・ニモ」を中心に、調査期間中で最高値を示している。この結果によく現れているように、「接続」の誤用は、単文の多い学習初期にはあまり現れない。ところが学習段階の進展に伴い、複文が増え、接続の仕方が大きな問題となり、誤用が増えていくことがわかる。

## 4. 学習段階と「カラ・ノデ」「テ」の誤用の実態

次に「カラ・ノデ」の誤用を見てみよう。<表2>のように誤用の半数以上が「テ→カラ・ノデ」の誤用であり、これは学習段階が進行しても一向に減少していない。これは「テ→カラ・ノデ」の誤用の多くが一過性の「slip」や「mistake」ではなく、韓国語の干渉などによる「error」である可能性を示唆している。<sup>2)</sup>

一方「テ」の誤用は<表3>のように、他の接続助詞の誤用に比べて、<第1期>から誤用が目立っている。ということは「テ」は<第1期>から比較的よく用いられたということである。言い換えれば<第1期>において、作文に占める複文の比率が増加するに伴い、学習者はまず「テ」をよく使うということである。

また上述したように、理由を表す場合に「カラ・ノデ」を使わず、「テ」を用いる傾向があり、こうした誤用「テ→カラ・ノデ」は「テ」の誤用全体の3割以上を占めている。

以上のように「テ→カラ・ノデ」の誤用は、学習初期から現れ、その頻度も多いことがわかる。そこで次にこうした誤用の原因について考えてみよう。



1) 森山 新, “韓国人日本語学習者の誤用について: 作文による事例研究を中心として”(碩士學位論文, 高麗大校教育大学院, 1996年6月), 以下「前回の調査」とは、この論文の調査をさすこととする。

2) 森山 新, “韓国人日本語学習者の誤用について: 作文による事例研究を中心として”(碩士學位論文, 高麗大校教育大学院, 1996年6月), pp. 20-21

<表1> 作文の各学習者段階の「接続」の誤用数

誤用項目	自至	9306 9405	9406 ～08	9409 ～11	9412 9502	9509 ～11	合計
	期	1	2	3	4	5	
カラ・ノデ		7	12	9	14	10	52
テ		12	15	18	8	23	76
条件 (ト・バ・タラ・ナラ etc.)		12	12	5	13	29	71
ノニ・ニモ		2	11	7	9	41	70
ガ・ケレド(モ)		2	9	6	8	21	46
テモ			3	2	1	1	7
中止法・シ・タリ		4	4	6	3	17	
ナガラ		2		2	2	12	18
引用 (ト・トウ・トウ etc.)		5	6	7	4	8	30
<b>接続の誤用の合計</b>		<b>46</b>	<b>72</b>	<b>62</b>	<b>59</b>	<b>148</b>	<b>387</b>

「自9306 至9405」とは93年6月～94年5月に書かれた作文であることを示す。

<表2> 各学習段階における「カラ・ノデ」の誤用傾向の内訳

誤用の種類	学 習 段 階					合計
	1	2	3	4	5	
テ→カラ・ノデ	4	7	7	3	7	28
カラ→テ		1		2		3
テ→タラ	2	2	1	2	1	8
カラ→デ		1		1		2
カラ→タメ		1		4		5
カラ→モノ				1		1
φ→カラ			1	1		2
ノデ→ト	1					1
ノニ→ノデ					1	1
その他					1	1
<b>「カラ・ノデ」の誤用の合計</b>	<b>7</b>	<b>12</b>	<b>9</b>	<b>14</b>	<b>10</b>	<b>52</b>

「φ→カラ」は「カラ」の欠如を示す。

<表3> 各学習段階における「テ」の誤用傾向の内訳

誤用の種類	学 習 段 階					合計
	1	2	3	4	5	
テ→カラ・ノデ	4	7	7	3	7	28
カラ・ノデ→テ		1		2		3
テ→ナガラ	1					1
ナガラ→テ			1	1	10	12
テ→デ	1					1
デ→テ			1			1
テ→ノニ					1	1
ノニ→テ					1	1
テ→シ	1	3	6			10
テ→タラ				2	1	3
テ→中止法	2					2
テ→タリ		1				1
クテ→ク		1	1			2
テ→ト		1				1
テ→ヨウ			1			1
テ→ケレド					1	1
テ→ニ					2	2
テカラ→テ	1		1			2
カラ→テカラ	1					1
ト→テカラ	1					1
その他		1				1
「テ」の誤用 合計	12	15	18	8	23	7

**참고문헌**

- 1) 森山 新, “韓国人日本語学習者の誤用について”高麗大学教育大学院修士論文, 1996.
- 2) 国立国語研究所, 「現代語の助詞・助動詞:用法と実例」, 1987.

# 韓国人日本語学習者の誤用について(2)

—接続助詞「テ」と「カラ・ノデ」を中心として—

森山 新 (홍익대학교 전임강사)

## CONTENTS

5. 「テ→カラ・ノデ」の誤用の原因
6. 「テ」と「カラ・ノデ」の違い
7. 誤用の原因
8. おわりに

◆2회에 걸쳐 연재

<지난호에 이어>

## 5. 「テ→カラ・ノデ」の誤用の原因

まず第一に日本語「テ」と韓国語「해서」の違いである。日本語「テ」は、「ある動作・作用から次の動作・作用への推移・連続」<sup>1)</sup>を示し、ここから「並列」的な用法と「理由提示」的な用法とがある。例えば、01)は「並列」、02)は「理由提示」である。

01) 朝起きて、顔を洗って、歯を磨く。

02) 事故があって、授業に遅れた。

つまり「S<sub>1</sub>テS<sub>2</sub>」において、時間的経過の中でまずS<sub>1</sub>が起き、それに続いてS<sub>2</sub>が起きていくのであるが、01)ではS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>が単に「並列」の関係にある(理由と結果の関係がない)のに対し、02)ではS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>とが理由と結果の関係にある。

しかし、「テ」に「理由提示」の用法があるとはいえ、それはあくまでも「推移・連続」の域を脱し得ず、消極的な理由提示にすぎないという点に留意しなければならない。

これに対し韓国語「해서」は、「テ」同様に「推移・連続」を表すものの、02)のような「理由提示」的な用法

だけを持ち、01)のような「並列」的用法はない。

韓国語において「並列」は「하고」で表されるからである。つまり「해서」は「推移・連続」の意味でありながらも、必ず前接要素S<sub>1</sub>が後続要素S<sub>2</sub>の理由となっているもののみを接続する関係上、「理由提示」の性格は「テ」に比べ、はるかに積極的なものとなる。

こうしたことから、「해서」が「推移・連続」の域を越えて、かなり積極的な「理由提示」の意味を持つことがある。その場合に、これを「テ」で表すことは難しくなる。「テ」と「해서」との間で、理由提示の積極性にズレが生まれるからである。

例えば、「なぜなら(ば)」は積極的な理由提示の接続詞である。従ってこれと共に起しうる接続助詞は日本語の場合、理由提示に消極的な「テ」ではなく、「カラ・ノデ」や原因提示の「タメ(二)」である。ところが韓国語で「なぜなら(ば)」に相当する理由提示の接続詞「왜냐하면」に「해서」は共起しうるのである。こうした「理由提示」の積極性の違いが誤用を生み出す最大の原因となっている。

これを表で表してみよう。理由提示の積極性の

程度を「+」で表す。「テ」は「並列」と「消極的な理由提示」の用法があり、これらの理由提示の積極性をそれぞれ「0」、「+」で表す。「해서」には「積極的な理由提示」の用法もあるので、これを「++」と表す。このようにして理由提示の積極性を比較したのが<表4>である。

つまり日本語においては、「テ;0~+」「カラ・ノデ;+~++」「タメ(二);+++」の積極性を持つものに対し、韓国語では「하고;0」「해서;+~++」「하기 때문에;++~+++」の積極性を持っているということである。これをみれば「해서=テ」と単純にはいえないことは明らかである。「해서」は「テ」となる場合と「カラ・ノデ」となる場合とがある。したがってもし、「해서=テ」、「하기 때문에=カラ・ノデ」と「語彙レベル」で単純に置き換えている日本語学習者がいるとすれば、「해서=カラ・ノデ」となるべき場合に誤用が生じてしまうのである。

Stackwell et al. (1965)は対照分析に基づいて<表5>のような難易度の階層性を示した<sup>2)</sup>。これは、

<表4> 理由提示の積極性の比較

日本語	理由提示の積極性	韓国語		日本語	韓国語
テ	0	하고	→	テ	하고
カラ・ノデ	+	해서		カラ・ノデ	해서
	++			하기 때문에	
タメ(二)	+++			タメ(二)	

<表5>対照分析に基づく難易度の階層

難易度	困難性のタイプ	L1: 英語		L2: スペイン語	例
難	1. 分離	X	→	X/Y	for → por/para
↑	2. 新規	φ	→	X	文法的性
	3. 欠落	X	→	φ	時制保持のdo
↓	4. 融合	X/Y	→	X	his/herが共にsuに融合する
	5. 一致	X	→	X	-ing=-ndo (知覚動詞の補部)

(Stockwell et al. 1965; Larsen-Freeman & Long 1991:54 の引用に基づく)



理由は、交通事故があったことである」という意味になる。例えば遅刻した学生が、先生にその事情を説明する際、先生からは何の問いかけもなく学生が一方向的に発言するような状況では、理由とその結果が共に関連づけて説明されなければならないので、05)のようになるであろう。しかしもし先生がまず、「どうして遅れたんだ。」といった質問をしたような場合には、学生の答えはもっぱら理由説明に重点が置かれ、06)のようになる場合が多いであろう。

(2)「なぜなら(ば)」など、積極的な理由提起の表現と共に用いられる時は、「S<sub>1</sub>テS<sub>2</sub>」を用いることはできず、「S<sub>1</sub>カラS<sub>2</sub>」が用いられる。

07)私はね、自信がだんだんなくなる。どうしてなら、とつてもじょうずな人が多くて(→多いから)。(9410)

08) どうしてなら3時から患者があつて、歯医者さんが6時に約束があつて(→あつたから)早く終わりますね。(9411)

(3)理由を提示するS<sub>1</sub>に話題の焦点があつたり、S<sub>2</sub>に比べてS<sub>1</sub>が長かつたりして、相対的にS<sub>1</sub>の比重が重い時には、「S<sub>1</sub>カラS<sub>2</sub>」や「S<sub>1</sub>ノデS<sub>2</sub>」が用いられやすい。

09)でものこつた部分があつて(→あつたから)書いている。(9501)

10)先輩と一緒にHデパートに行こうとして(→言つたので)、電話できませんでしたよ。(9408)

11)ひるにはとつてもあつくて(→あつていから)、勉強もできないですよ。(9407)

(4)理由を提示する「テ」以外の「テ」が用いられている場合などは、混同を避け、「S<sub>1</sub>カラS<sub>2</sub>」「S<sub>1</sub>ノデS<sub>2</sub>」が用いられることが多い。

12) どうしてなら3時から患者があつて、歯医者さんが6時に約束があつて(→あつたから)早く終わりますね。(9411)

13)でも時間が遅くなつてしまつて(→しまつたから)、まず勉強しようと考えて今勉強していますね。(9409)

14)きのうとつても遅れてしまつて(→しまつたから)、今日早く起きましたよ。(9409)

(5)S<sub>2</sub>が勧誘、命令、意志、依頼などの文の場合には

「S<sub>1</sub>テS<sub>2</sub>」を用いることはできず、「S<sub>1</sub>カラS<sub>2</sub>」「S<sub>1</sub>ノデS<sub>2</sub>」が用いられる。

15)天気がよくて(→よいから)、遊びに行きましょう。(勧誘)

16)寒くて(→寒いから)、窓を閉めて下さい。(依頼)

## 7. 誤用の原因

### 1) 日本語教育の問題

誤用には「語彙レベル」、「文構成レベル」、「談話レベル」の3段階の誤用がある。そして本稿で扱ってきた接続の問題は、「文構成レベル」で扱われるべき問題である。言い換えれば接続の問題は「文構成レベル」で教えられてこそ、誤用を防ぐことができるのである。

ところがはじめでも少し触れたが、外国語学校などの教育現場において、今もなお、こうした接続の問題が「文構成レベル」でなく、単に「語彙レベル」で教えられているきらいがある。例えば表6>のように「テ」は「하고・해서」、「カラ・ノデ」は「하기 때문에」といった誤った図式で教えられ、このほかにも「ト・バ・タラ」は「하면」、「ノニ」は「하는데」、「ケレド・ガ」は「하지만」、「ナガラ」は「하면서」、「ト(引用)」は「라고」というように、単に「語彙レベル」で置き換えられて教えられている場合が多いのではないだろうか。

<表6> 「語彙レベル」における「テ/カラ・ノデ」の誤った図式

日 本 語	韓 国 語
テ	하고
テ	해서
カラ・ノデ	하기 때문에

ところが接続の問題は、接続助詞で結ばれた前接要素(S<sub>1</sub>)と後続要素(S<sub>2</sub>)が、接続助詞を中心としてどのような関係で結びつけられるかが詳しく説明されなければならない。特に紛らわしい接続助詞の違いは、単に「語彙レベル」で説明しきれ



るものではなく、文全体としてS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>との関係がどうなっているのかの詳しい説明が必要である。これを単に「語彙レベル」で教えた場合には、母語の干渉を受けた、様々な誤用を生み出すことになるのである。

韓国語と日本語は似ているという先入観は、学習者のみならず教師をして、ややもすると「語彙レベル」での逐語訳的学習に向かわせやすい。しかしすでに述べたように、いくら両国語が似ているからといっても、例えば、「テ」と「해서」には微妙な意味上のズレがあるのであり、決して「語彙レベル」で扱われるべきものではないのである。特にStackwell et al. が対照分析において「分離」型(X→X/Y)、「新規」型(φ→X)、「欠落」型(X→φ)としたようなものについては、特に母語の干渉が起きやすいので、とりわけ「語彙レベル」での教育は避けなければならない。

このように接続に関する日本語教育において重要なことは、接続は「語彙レベル」ではなく、少なくともいくつかの例文を提示する中で、「文構成レベル」で教えられなければならないということである。特に中・上級レベルに至っては、6で述べたような紛らわしい接続助詞相互間の違いにまで触れられれば、より正確に接続助詞の問題を処理できるようになるであろう。

ところで、接続の問題が「語彙レベル」で教えられてしまっている背景には、教授法の問題も関係していると思われる。これまで韓国国内において盛んに用いられてきた文法訳読方式では、目標言語(日本語)と母語(韓国語)とを単純に置き換える形で授業が進められる場合が多く、そうした中で接続助詞もまた、「語彙レベル」で扱われてしまうことが少なくないのである。

また「ト・バ・タラ」など、韓国語では同じく「하면」と表現しうる接続助詞については、実際の用い方とは別に、なじみの深いものや用法の簡単なものが優先して用いられやすい。例えば「ト・バ・タラ」の中で、実際には「タラ」が最も広く用いられ、「ト」は制限も多く、実際の使用範囲はあまり広くないのであるが、教育現場においては逆に「タラ」は敬遠される傾向にある一方で、「ト」は活用も簡単で学習初期に習うということからよく

用いられると言ったことなどが、そのよい例であろう。

こうした問題は、これまでの日本語学習が、主に「構造シラバス」に基づき、「易から難へ」と教えられる教材や教授法であったことの弊害であると言えるであろう。この問題は「機能シラバス」など、「より使われるもの」中心の教育導入の必要性を示唆している。

## 2) 母語の干渉

接続助詞の誤用のいくつかは母語(韓国語)の干渉を受けて生じたものである。例えば、前述したように「해서 그럴까」を「てそうかな(→からかな)」としたり、「하면서 있다」を「ながらいる(→ている)」、「할까 생각하다」を「か思う(→かと思う)」などとしてしまうのは、母語の干渉を受けた誤用の代表的な例である。この他にも引用のうち、強意の「トイウ」の欠如や、「と思う」の欠如などにも多分に母語の干渉が作用している<sup>9)</sup>。

母語の干渉は、ある意味では外国語学習上避け難い現象であるとはいえるが、特に干渉の問題においては、例文を提示する中で、「文構成のレベル」での接続助詞の役割や、接続助詞の前接要素(S<sub>1</sub>)や後続要素(S<sub>2</sub>)との関係をよく理解させ、「語彙レベル」での学習によって生じる母語の干渉を、最小限に食い止める必要がある。また同一の前接要素に対して、様々な後続要素を準備しておき、それぞれの文を連結させるにはどのような接続助詞が最もふさわしいかを考えさせたり、様々な前接要素に対し、どのような後続要素が来るかを考えるなど、「文構成レベル」で接続助詞の役割を考える練習問題なども有効であろう。

## 8. おわりに

接続助詞「テ/カラ・ノデ」誤用を中心に「語彙レベル」での日本語教育の問題点や母語の干渉について見てきた。

Kellerman(1983)の心理的類型論(Psychotypology)によれば、ある形式が転移されるかどうかは、その形式が目標言語で容認されるか否かの判断にかかっているが、この判断は学習者が母語と目標

言語の間の類型論的な隔たりの程度をどのように認識するかによって決まるといふ<sup>6)</sup>。すなわちこの心理的な隔たりが小さければそれだけ転移の可能性が高くなり、逆に隔たりが大きく感じられると転移の可能性が低くなるということである。日本語学習者、さらには日本語教育者の多くは、韓国語と日本語の類似性を認識している。言い換えれば2言語間の心理的隔たりは英語などの他の言語に比べて小さく、それだけ母語の転移(干渉)の可能性は高くなるということである。また韓国人にとって、英語を学習する場合より日本語を学習する場合の方が母語の転移(干渉)の可能性も高いということでもある。

これが事実であるとすれば、韓国人学習者は日本語を学ぶ際に、母語の干渉にとりわけ注意を払わなければならない。

またKellermanは、

①母語と目標言語が心理型論的に近いと認識され

②母語のある項目が心理言語的に無標であると判断されたとき

転移が起きるといふ。これによれば日本語と韓国語とは①のように心理類型論的に近いと認識され、しかもこれが「語彙レベル」で逐語訳的に教えられるとするならば、②のように母語(韓国語)の各項目は目標言語(日本語)に対して心理言語学的に無標であるという認識を与え、さらに多くの母語の転移(干渉)を引き起こすことになる。つまり教育者の立場として、次の2点に絶えず注意を払わなければならない。

①必要以上に両国語の類似性を強調しすぎると母語の干渉を引き起こす。

②「語彙レベル」の逐語訳的な教育は母語の干渉をより増加させる結果となる。

このことは文法訳読方式の教授法においてはなおさらのことである。

1) 国立国語研究所, “現代語の助詞・助動詞:用法と実例”(1987年), p. 75.

2) 山岡俊比古, 「第2言語習得研究<新装改訂版>」(桐原ユ二, 1997年), pp. 190-191

3) 山岡俊比古, 「第2言語習得研究<新装改訂版>」(桐原ユ二, 1997年), pp. 212-215.

4) 山岡俊比古, 「第2言語習得研究<新装改訂版>」(桐

原ユ二, 1997年), pp. 215-217.

5) 詳しくは、森山新, “韓国人日本語学習者の誤用について:作文による事例研究を中心として”(硕士学位论文, 高麗大学学校教育大学院, 1996年6月)を参照のこと。

6) 山岡俊比古, 「第2言語習得研究<新装改訂版>」(桐原ユ二, 1997年), pp. 217-219.

1) 国立国語研究所, 「現代語の助詞・助動詞:用法と実例」. 1987.

2) 森山新, “韓国人日本語学習者の誤用について:作文による事例研究を中心として.”高麗大学学校教育大学院修士論文, 1996.

3) 山岡俊比古, 「第2言語習得研究<新装改訂版>」. 1997.